

STEP 1

はぐくみマインドをセットして 固定観念を見つめなおす。

いのちのめぐりの観点から改めて保育を捉えなおし、どのような保育の可能性があるのかを自らに問い、
考えていく大前提として、はぐくみマインドを取り入れてみましょう。



はぐくみマインド その1

いのちのめぐりを意識しよう！

ひとつとして同じものが存在しない、「いのち」そのものである子ども一人ひとりに向き合い、生涯を支える心と体をはぐくんでいくことが、保育の使命です。子どもだけでなく、私たち自身も自然の一部として、すべてがつながり合う「いのちのめぐり」のなかにいることを意識したとき、子どもの「いのち」が輝くための選択を、日々積み重ねることができているでしょうか。また、自分自身のあり方に対して無理な選択をしていることはないでしょうか。

「いのちのめぐり」を意識することは、目の前の「しなければならぬ」を超えて、すべての「いのち」が輝くための選択に気づかせてくれるはずです。「自然保育」「食育」「芸術」の3つのテーマも、生きる上で欠かせない要素であることに改めて気づくかもしれません。その視点に立って、「学ぶ力」「生きる力」がはぐくまれるための保育とは一体どのようなものなのか、共に考えていきましょう。



はぐくみマインド その2

自然の営みに
まね
学ぼう！

自然の営みは、自然界の法則を私たちに伝えています。子どものいのちがはぐくまれる保育も自然の営みのひとつとして見てみると、保育の現場にも自然界の法則が当てはまるはず。「学ぶ」とは、もともと「まねぶ(真似ぶ)」から生まれた言葉。自然の営みを保育のマインドセットとして取り入れてみましょう。

待つ



学びの可能性のたねは、子どものなかにあるものです。「こうしたらいんじゃない?」と導くつもりが、子どもの学ぶ機会を奪っているかも。たねは「待つ」ことで芽吹きます。ときには、子ども自身が学びをはぐくむ力を信じて待ってみましょう。

流す



水の流れは淀みをなくし、清らかな状態をつくり出します。子どもを取り巻く現場にはさまざまな情報や感情が溢れています。地球をめぐる水のように、情報や感情の流れを意識して、停滞する雰囲気があるときには流していきましょう。

燃やす



火は人の心と体を温め、安心して生きることを支える存在です。あなた自身の保育への情熱を燃やすことで、子どもが安心して学べる土壌を整えましょう。

照らす



夜空を照らす星や月は、見えないところに光を当てる存在です。「見よう」としないと見過ごしてしまう子どものキラッと輝く姿に、あなた自身が星や月となって、優しい光を当ててください。

つなぐ



花粉を運ぶ虫や、たねを運ぶ鳥といった自然界のつなぎ手は、芽吹きと実りを促す存在です。子どもの気づきや学びを次のきっかけにつなげる担い手になりましょう。そして、手と手をつなぎ合わせて、信頼のバトンを渡せるチームをつくりましょう。

はぐくみマインド その3

自然界にも保育にも 正解なんてない!

自然界には「正解」という答えはなく、さまざまな形が存在することで豊かな世界が成立しています。保育の日々も試行錯誤の連続で、自然界と同じように正解がない世界です。だからこそ、保育の実践が豊かなものになるためには、自分自身で問いを立て、推理し、試してみるという「はぐくみマインド」を磨くサイクルを意識することが大切です。

そのサイクルを意識するための一歩目は、問いを立てること。本書を手垢がつくほどに手に取って、見つけた問いと対話するように保育の実践を磨いていってください。そうするうちに、自分のなかの保育の指針やスキルがいつの間にかはぐくまれ、きっと子どもの姿や保育の現場の見え方も豊かになっているはずです。

はぐくみマインド その4

誰もがみんな ありのままがいい!

私たちが暮らす奈良には、「大和野菜」という在来野菜があります。これらの野菜は、土地土地に存在し、その場所の気候風土に順応し続けた結果、他所にはない唯一無二の姿をしています。この法則に則れば、人も同じように、誰かが用意した型に無理やり当てはめるのではなく、それぞれの環境でありのままにいられることで、唯一無二の存在として、その人らしい

力を発揮することができるようになるはずです。世界が同じ考えや行動パターンで溢れてしまったら、なんて味気のないことでしょう。一人ひとりのありのままを尊重し、子どもも、保護者や保育者も多様なあり方を認め、お互いに補い合うことで彩り豊かな世界をつくりましょう。



STEP 2

はぐくみメガネで 新たな視点に出会う。

固定観念を見つめなおしたら、次は新たな視点に出会いましょう。

「子どもの姿」「保育者の多様性」「環境の設定」という3つのフレーム(視点)が、
保育の可能性を広げてくれるはずです。



保育の可能性を広げる 3つのフレーム(視点)

保育現場での出来事は、「子どもの姿」「保育者の多様性」「環境の設定」という3つのフレームが影響し合いながら発生します。

それぞれに関する理解を深め、より良い選択をしようとする意識とアクションが、あなたの保育の可能性を広げてくれるでしょう。

1

子どもの姿

子どもの状態は常に変わり、興味・関心も種々様々です。
その変化や個性によって、より良い関わり方も変わります。



2

保育者の多様性

保育者にもそれぞれの状態や特性があります。
保育者の多様性に目を向けると、
新たな保育の可能性が見えてきます。



3

環境の設定

屋内と屋外のようなハード面での環境はもちろん、
場の空気や雰囲気に関わるソフト面での
環境設定も保育の質に大きく影響しています。



フレーム①

子どもの姿

子どもの姿を観察する際、どんなことを意識したらいいんだろう。そんなふうに思ったことはありませんか？
 子ども一人ひとりに向き合ってみると、一人として同じでない個性豊かな姿が見えてきます。
 そんな多様な子どもの個性を肯定する関わりや環境づくりのために、
 「子どもの姿」という視点で、どのような傾向が考えられるのか見ていきましょう。

興味・関心のタイプ

ロケット型



興味が多岐にわたり、気になることがあればすぐに行動したくなる傾向が強い場合、活動的でどんどん試そうとするチャレンジも応援してあげましょう。

サブマリン型



ひとつのことに興味を持って追究しながら、深めていく傾向が強い場合、時間を気にせず没頭する姿を肯定してあげられる環境をつくりましょう。

バルーン型



周りをよく見て行動する傾向が強い場合、物事の状況を把握できるとスムーズに行動を起こせるので、複数の興味・関心を並走させてつなげてあげましょう。

得意な学び方

目で学ぶ



目で学ぶ傾向が強い子どもは、イラストや写真、動画などの視覚情報があると理解が深まりやすいです。目に見える情報の提示を工夫してあげましょう。

耳から学ぶ



耳から学ぶ傾向が強い子どもは、話や音を聞いて、イメージを豊かにすることが得意です。情報を耳から得られるような場面をつくとよいでしょう。

体験して学ぶ



体験して学ぶ傾向が強い子どもは、試すことで理解が深まりやすいです。言葉で理解しづらそうなきは、実際に試せる機会をつくるようにしてみましょう。

表現方法

表情で表現する



心の内を表情で表現する傾向が強い子どもがいます。言葉にならない複雑な感情も、表情から汲み取り、心の声を読み解いてあげましょう。

しぐさで表現する



感情や考えを態度やしぐさ、体の動きで表現する傾向が強い子どもがいます。「黙る」という態度も表現方法のひとつなので、注意して見守ってあげましょう。

言葉で表現する



自分の考えやイメージを言葉で表現することが得意な子どもがいます。話しながら、言葉を使って相手に伝えていく場面を積極的につくりましょう。

※東京大学先端科学技術研究センターが2014年～2019年に行った異才発掘プロジェクト「ROCKET」の研究結果を参照／あくまで子どもの状態を示すもので、診断したり、特定したりするものではないので、ご注意ください

フレーム②

保育者の多様性

保育者にも当然、得手・不得手、好きなことや苦手なことなど個性があり、状態もその時々で変化します。
 だからこそ、保育者一人ひとりが、自身の個性や状態に配慮した
 「自分らしい関わり方」を大切にできると、保育にも多様性が生まれるはず。
 苦手をチームのなかで補い合い、それぞれの良さが生きる現場で子どもの成長を支えましょう。

Question たとえば、子どもの興味・関心が「昆虫」に向いているとき、保育者の個性を生かしたアプローチにはどのようなものが考えられるでしょう？

昆虫が好きなAさん



昆虫に関する知識や経験を生かし、子どもと一緒にワクワクしながら生態を探究する。

- 例**
- ・昆虫のすみかを探してみよう
 - ・昆虫が飛べるのはなんでだろう？

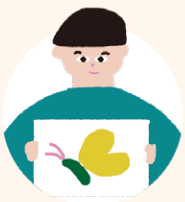
地理・歴史好きのDさん



昆虫の生態分布という視点で、その特性や違い、自分の住む土地を知るきっかけをつくる。

- 例**
- ・山の昆虫の地図を作ろう
 - ・どれが昆虫の化石かな？

創作が得意なBさん



ものづくりを通して昆虫の生態を知り、子どもの感性や発想から自由に表現してもらおう。

- 例**
- ・昆虫が着る洋服を作ろう
 - ・昆虫の紙芝居をみんなで考えよう

食に詳しいEさん



給食や料理を通して、人も昆虫も「生きるために食べる」といういのちのサイクルを体験する。

- 例**
- ・昆虫って食べられるの!?
 - ・人と昆虫のごはんの違いは？

音楽が得意なCさん



昆虫の羽音や鳴く音に着目し、その理由や方法を探究、または音楽や楽器で表現する。

- 例**
- ・虫ってどんな声で鳴くのかな？
 - ・カマキリの歌をみんなで作ろう

農家の知人がいるFさん



「プロの人」とつなぐことで、園庭で見られる昆虫と畑にいる昆虫の違いや、昆虫と農作物との関わりを知る。

- 例**
- ・畑にいる昆虫は何をしているの？
 - ・昆虫はなぜ野菜を食べているの？

Point

苦手なテーマがある人は、それが得意な仲間を見つけよう！



得意な仲間と一緒に取り組むことで、お互いに思ってもみなかった、ユニークなアイデアが生まれることがあります。また外部の「プロの人」と連携することで、あなた自身も新たな魅力を発見できるかもしれません。



フレーム③-1

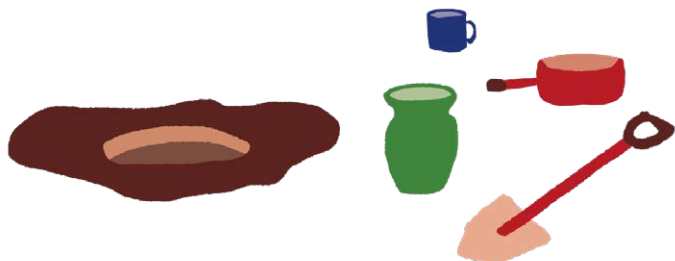
環境の設定

子どもを取り巻く環境は、意欲や行動を引き出したり、制限したり、さまざまに働きかけてきます。無意識のうちに環境が子どもに与える影響は大きく、そこで見たものや感じたことは、やがてそれぞれの原風景になるでしょう。だからこそ、子どもの姿やその状態に合わせて環境をより良く整えることはとても大切です。ここでは、子どもの姿を引き出す環境の事例を見ていきましょう。

Question 環境の設定に作用する要素には、どのようなものがあるでしょうか？

道具

道具選びは、子どもの創造性や探究心に関わってきます。道具を全部揃えることは大事ですが、ないことが工夫する機会を生む場合もあります。あえて目的と少しズレた道具を用意することも、子どもが知恵を絞るチャンスとなるかもしれません。作業するための道具ではなく、子どもの思考や心をはぐむ道具選びを意識してみましょう。



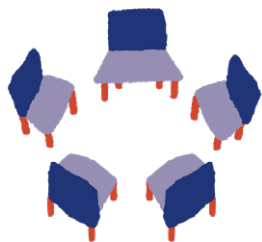
共通認識(クレド)

それぞれの園で掲げている理念を実現していくために、日常で心がけたいことを、保育者はもちろん保護者を交えて共通認識として言葉にしておく、理念が保育の現場に浸透し、それが叶っていきます。



人

子どもは見知らぬ人がやってくるだけで興味を持ちます。農家さんや絵描きさんなど、特別な知識やスキルを持った人たちは、子どもの探究心を刺激し、できることを増やしてくれます。学びの場を深めたいときには専門家に声をかけて、学びを共につくる仲間になってもらいましょう。



教室の配置・レイアウト

前を向いて一方向で座るレイアウトと、ぐるりと輪になって座るレイアウトでは、入ってくる情報の質が変わってきます。しっかりアナウンスを伝えたい場面なのか、心の状態に寄り添いつながり合う場なのかなど、目的によってレイアウトを意図的に変えてみましょう。



時間

子どもがのびのびと創作活動に没頭しているときには、時間の枠を思い切って外してみるのもひとつの方法です。一方で、集中してやり遂げる場面や、ネガティブな感情が顔を出している場合には、時間を区切ることが有効な場合もあります。時間を上手に操る、「時間の使い手」を目指しましょう。

フレーム③-2

環境の設定

子どもを取り巻く環境にはどのようなものが含まれているでしょうか。
それらは、子どもが育つ空間そのものに影響したり、その空間を構成する空気や雰囲気大きく作用したりします。
目に見える物理空間だけでなく、精神的な状態を整えることや、意図をもっていつもと違う選択をすることで、
子どもの姿が大きく違ってくるはずです。

製作意欲を引き出し
試行錯誤を促す環境

写真提供：やまご保育園



- ・多くの選択肢が素材や道具として用意されている
- ・素材や道具が整理されていて使いやすい
- ・危険なもの以外は、許可なくすぐに使える

興味に没頭し探究を
広げ・深めていく環境

写真提供：やまご保育園



- ・やってみたことが子どもの視野に入るようになっている
- ・続きがすぐにできるように飾られている
- ・やっていたことが思い出しやすく展示されている
- ・その時々興味・関心を共有する場や、機会がある

諸感覚で自然の情報をつかみ、
発見や感動に出合える環境

写真提供：森のようちえんウイズ・ナチュラ

- ・身体感覚が働くような、刻々と変化する自然環境（温度、風、天気など）がある
- ・意図して設計することができない動物や植物との偶然の出合いがある

Point

「構造化」によって、屋内でも屋外でも多様な環境を生むことができます。

環境を設定したり、意図的に「構造化」したりすることで、目的に応じた学びの場をつくり出すことができます。「構造化」とは、環境を構成している要素を分類や定義することで、構成要素の関係性を整理することを表す言葉です。道具を機能によって分類したり、箱を色分けしてわかりやすくしたり、「絵本を読む

エリア」や「製作エリア」など活動ごとにエリア分けすることも構造化の一例です。この環境が正しい、良い環境だと評価することが重要なのではなく、子どもの興味・関心や状態に合わせて、どんな環境が必要なのかを見極め、臨機応変に選べるのが大事なポイントです。

